

帝国の没落と「もうひとつの世界」への道筋を探る(下)

——ブッシェ政権の終末を目前にして

武藤一羊

前回の議論では、ブッシェ政権の八年間が終わる中でアメリカグローバル帝国は長期にわたる没落期に入り、その中でグローバルな民衆の運動は、「もうひとつの世界」をどのように準備し、実現するかを本格的に探究し、見つけ出す局面に入ったことを、世界社会フォーラム(WSF)内部での意見の分岐に少し触れつつ、指摘した。グローバルな運動がネオコン戦略とネオリベラル政策への反対派として成立する条件が失われつつあるのである。ここへきて、アメリカ帝国崩壊期のグローバル資本主義を襲う危機は、前回の議論で想定していたより激烈な様相を表し始めた。環境、石油、食糧という三つのイッシュユウが、投機資本のほしいままの増殖追求の活動によって悪性の結合をとり、複合的危機は、G8はおろか、国連にも、帝国中枢アメリカにも制御できない暴走を開始する可能性を帯びている。そうであればなおさら「もうひとつの世界」をどのように準備するかという問いは、ますます切実に待ったを許さないものになるであろう。動乱のなかで「もうひと

つの世界」の最低限の骨組みがあるかないかが大きい違いをもたらすに違いないからである。そう想定して、前回の議論を続けよう。

さて「もうひとつの世界」を準備し、現実化するとはどういうことか。常識的にいって、そこには三つの問いが含まれる。第一には「もうひとつの世界」とはいかなる世界か、第二に、だれが「もうひとつの世界」をもたらすのか、そして第三にいかにして「もうひとつの世界」を実現するかという問いである。しかしこの三つの問いは相互に結びついている。「だれが」と「いかにして」は「いかなる」と相関し、「いかなる」は「いかにして」によって大幅に規定される。結果が正当ならどんな手段も正当化されるといふ考えがどんな惨憺たる結果を生んだかを二〇世紀の歴史の中で私たちは十分すぎるほど味わってきた。「いかなる」はまた「だれが」によって根本的に決まってくることは最初から明らかだ。これら三つの次元は分かちがたく組み合わされている。今回の議論ではこの問題への糸口を「だれ

が」と「いかにして」の方から、すなわち運動の方から、探ってみよう。

▼運動たちの運動

世界社会フォーラム(WSF)がスペースか運動かという議論はあまりにWSFの内情につきすぎた議論である。私たちは、一九九〇年代の末からグローバルな民衆運動の出現と展開を目にしている。その衝撃的な出現を告知したのは、広く認められているように一九九九年のシアトルにおける大デモが世界貿易機関(WTO)の閣僚会議を流会に追い込んだ事件であった。この運動は、一九六〇年代後半における社会運動のパラダイムの転換を間接的に引き継ぎつつ、「もうひとつの世界は可能だ」というスローガンのもと、グローバルな変革を志向するさまざまな運動の合流として出現した。WSFがこの運動の一部であることは疑いようがない。この運動は、シアトルデモで突如として出現したわけではなく、世界銀行やIMF、G8サミットなどグローバルな権力中枢への抗議デモ、国連の主催する大規模な国際会議への対抗員などの形で、九〇年代を通じて積み上げられてきたグローバルなゆるいネットワーク型主体形成のプロセスの所産である。さらにヨーロッパ中心の言説世界ではほぼ無視されているが、一九八九〜九六年にアジアを中心にグローバル民主主義の主体を越境す

る民衆の連合として形成しようとした「ピープルズ・プラン21」の運動も今日のグローバル運動の歴史にふたたび位置づけることが必要であろう。そして何より、一九九四年、国家権力の奪取をめざすのではなく、下から世界を変えていくというまったく新しい見通しを宣言しつつ開始されたメキシコ・チアパスの先住民によるサパティスタ蜂起とその呼びかけによる国境を越えたネオリベリズムに対抗する結集——インターギャラクティック会議「E」——の衝撃がある。これらはひとつの運動ではないばかりか、性格も担い手も、スタイルも、文化も、歴史的背景もまったく異なっている運動である。にもかかわらず時代を共有しつつ響きあうところがあり、ゆるく大きく結びつくグローバルな存在として無視できない影響をふるっている。それをひとまとまりの運動と呼ぶためには、一九〜二〇世紀型運動の概念を作り直すことが要求される、そういう種類の新しい運動である。

私はこの運動を、歴史的な文脈の中で、世界資本主義をくつがえし、それに替わる公正な世界社会を導入することを目指す運動の第二波の出現という文脈で考えている。「文脈で」というのは、現に出現した運動が第二波の実体であるとは即断できないからである。運動は実体としては幾多の試練にあい変遷を経るだろう。しかしそれを生み出す場は、第一波を生み出したそれとはつきり区別される場であ

るだろう。

第一波は一九世紀ヨーロッパに始まった社会主義運動だった。この運動は、二つの世界大戦を通じてロシアと中国における革命の成功を基盤に二〇世紀世界の相貌を規定する大きい力となった。この運動がどのような経過をたどり、一九九〇年代に挫折したかについては展開できないが、その特徴が、(1) 国民国家の権力の奪取と永久維持、また植民地では国家権力の獲得を志向する運動であったこと、(2) 近代的生産力の獲得・建設により帝国主義・資本主義に対抗することを努力の中心に据えたこと、(3) 工業労働者階級が革命の主体であるとし、前衛党はその労働者階級を代表するとするドグマの上に統治を組み立てたことなどあったことは明らかである。これらの特徴は二〇世紀革命を成功に導いた要素であるとともに、その敗北と崩壊をもたらした致命的弱点をも構成していたのである。革命の名による陰惨な大量政治殺人、大規模な人権抑圧と民主主義の破壊および工業化信仰に基づく自然の破壊などは致命的欠陥の最大のものに数えられる。

第二波の運動は今日出現したかぎりの姿においても、第一波とは明確に区別される。第二波運動は全体として、第一波運動の特徴のどれをも備えていない。そして第二波の運動は第一波がそうであろうと志向したような新しい単一の運動ではない。前述したように、それは関心においても、

スタイルにおいても、基盤とする社会集団においても、きわめて多様な運動——第一波を引き継ぐ集団をも含む——が結びあう複合的な運動である。

第二波の変革運動は出現の渦中であって、ダイナミックな変化の過程にある。第一波が社会主義運動と呼ばれたのに見合う名称はないが、一般的には「グローバル正義の運動」(global justice movement ≡ GJM)として言及されている「3」。オランダを活動拠点として新しい労働者の国際連帯を追求しているピーター・ウォーターマンによれば、GJMは「企業主導のグローバル化と米国が主導するネオリベラリズム・ネオコンそして戦争に抗議する全体的なうねり」として、新しいラディカル民主主義による抗議と提唱の高まりを表しており、「運動たちの運動」としての特徴はネットワーク形態とコミュニケーション活動にあるという。ウォーターマンによるこの運動の性格描写はなかなか面白いもので引用してみよう。この運動は「あらゆる新奇な現象と同じように」、それが何であるかよりも、それが「何でないかを示したほうが簡単に特徴づけられる」として次のようにいう「4」。

◆労働組合や社会主義者の関与は目立つが、国際労働運動や社会主義運動ではない。

◆国際的、国別NGOが派手に参加しているが、国際的アドボカシーのネットワークではない。
◆チェ・ゲバラの肖像がまだ人気を博し、六〇・七〇年代のその他の残響も感じられるが、一九六八年に続く国際的な抗議運動の生まれ変わりではない。

◆アナキスト、オートノミスト、リバタリアンは内部できわめて活発に動いているが、アナキズムの運動ではない。
◆内部にナシヨナリストや第三世界主義、反帝国主義の勢力と論調がはつきりと存在しているが、ナシヨナリストや第三世界主義の運動ではない。

こうした多様な潮流がひとつに合流する「運動たちの運動」の出現は新しいことだ。この第二波の運動はグローバル資本主義を掘り崩し「もうひとつの世界」を導きいれることができるだろうか。できるとすればどのようにしてか問題をこう立てたとき出現する最大の困難は、望ましい「もうひとつの世界」とは何かがまだはつきり見えないことにあるというより、むしろ「いかにして」が明確でないことにある。第一波の運動は「いかにして」について、それなりに明確な答えをもっていた。国家権力を奪取することによって、という答えである。武装蜂起によるか選挙によるか、とにかく社会変革のテコとして一国の権力をにぎることが成功、不成功を分けるカギであった。しかしグローバルな変革——グローバルな民主主義の獲得と新しいシ

ステムによる資本主義の乗り越えとひとまず定義しておく——については、それに見合うどのような決め手が見通せるのか。この問題についての議論と模索が「もうひとつの世界が可能である」と言い切るにはせひとも必要であると私には思われる。スペースか運動かというWSF内部の「戦略論争」がどちらにころんでも、問題はそこに差し戻されるのである。

私にはむしろこの問題への全面的な答えを持っていない。今のところ重要なのは、問題をはつきり立て、問題の性格をつきとめることである。そして現実の中に——今日のグローバル資本主義と帝国の支配とそれに対抗する多様な民衆の闘い・活動のなかに——問題解決の条件がどのように存在するかを探ることである。

▼〈運動際政治〉と〈民衆際政治〉

そのためにWSFでの議論をちよつと覗いてみよう。二〇〇八年春のWSF国際評議会は、二〇〇九年の大結集をブラジルのパラ州ベレムで開くことを決定したが、それに先立ってWSFの今後の方向について内部論争を組織した。WSFはスペースにとどまるかWSFとして政治的立場を明確にした運動に脱皮するかという論点が、カラカスのラテンアメリカWSF、二〇〇七年のナイロビWSFなどの経験を踏まえて再び争われたもので、状況の評価を含

めて内容のあるものだが、ここでは立ち入らない⁵⁾。

この議論の中で、ボヴェントウラ・デスーザ・サントスが「WSFとグローバル左翼」という論文で、「WSFのもつとも顕著な特徴」の第一に「運動政治の運動際政治への移行」を挙げていることが目にとまった⁶⁾。「運動際政治」(inter-movement politics)とは、「いかなるシングル・イッシュユウの社会運動も他の運動の協力なしではその固有の課題を達成することはできないという考え方に動かされる運動政治」だというのである。多様で異質な潮流が合流していることが「運動たちの運動」の何よりの特徴だとすれば、そこで問われるのは、それらの運動たちが相互の間にどのような認識と合意に基づいて固有の協力関係をつくりだし、持続させることができるかということであろう。そうでなければ、WSFの大結集は、多様で異質な潮流が何日間か場所と時間を共にし、グローバルな規模で仲間の存在を確認して元気をうるということに帰着し、それはそれで意義のあることだが、繰り返すたびにマンネリ化していくことは避けられないだろう。

WSFの大結集で数百の規模で開かれるフォーラムや会議、相談会などが、事実上「運動際政治」の場になっていることは疑いない。運動際政治はシングル・イッシュユウの運動間ばかりでなく、同じイッシュユウに取り組んだり、同じ階層に属したりしていても、異なる国、大陸、文化から

古典的革命運動理論では、政党が階級を代表するとされるので、労働者政党と農民政党の同盟はその基盤階級の同盟、労農同盟を意味するとされた。あるいは、ロシア革命では、都市労働者に基盤をもつボルシェビキ党が、農民を代表する社会革命党(SR)の綱領をそのまま「盗み取る」ことで、SRを政権から排除しつつその「労農独裁」政権を合理化するという手品を試みたが、これも階級(民衆集団)が党によって代表されるという前提の上に行われた。逆にいえば、階級・民衆集団はそれを代表する党を通じて同盟を結んだり、分岐したりするものとされたのである。

第二波世界変革運動においては、このような前提は存在しない。党ばかりか、社会運動もその基盤としての民衆集団を代表し代行しない。だがそれは運動がそれ自身として、孤立して存在することを意味しない。社会的に意味のある社会運動はどれもその基盤となる社会集団と有機的に結びつき、その能動の一部となっているのだ。当然ながら、先住民の運動は先住民の集団を、フェミニスト運動は女性たちの集団をそれぞれ基盤としてもっている。だから、たとえば、この二つの運動の間に働く運動際政治はその基盤である先住民と女性という社会集団自身を巻き込み、その相互関係に影響してくるに違いない。すなわち運動際政治は運動際政治の次元に自足することはできず、かならず(社会集団際政治)(inter-social group politics)として(民衆

きている活動家の間にも当てはまるだろう。WSFに即していえば、WSFの運動化とは、WSFが全体の名前で何かの政治声明を出したり、綱領と組織を備えたグローバルな政治運動になることではなくて、意識的、系統的にグローバルな規模での運動際政治のプロセスを推進することにあると私は思える。WSFはこのプロセスを促す場、スペースとして機能していて、それがWSFの魅力なのである。だからWSFの運営という観点だけから見れば、WSFはスペースであるという議論は説得力がある。しかし帝国とグローバル資本主義を乗り越えるというWSFを含んだ「運動たちの運動」の見通しというより広い観点からは、WSFがスペースであることを確認するだけではすまないのである。

そこからもうすこし議論を進めよう。運動際政治を手掛かりにしてである。

運動際政治とは、異なったイッシュユウの連関の発見とその共有という側面をもつ。その連関を基礎に協力が成立し、深められるだろう。だがそれだけではない。それは運動間の関係にとどまらないのである。個々の運動の背後には運動の基盤になる人びとの(民衆の)集団(constituency)が想定される。図式的にいえば、運動がこの背後の民衆と有機的に結びついている場合、運動際政治は(民衆際政治)(inter-people politics)の次元を絡みこむのである。

際政治)の次元を引連れてくるのである。

この関係が重要であると私には思える。この二つの次元は有機的につながっていると同時に切り離しうるからである。異なる社会集団を基盤とするいくつかの運動組織の間で合意がなされたとしよう。この合意は運動組織間の合意にとどまるだろうか。それとも社会集団間の合意となるであろうか。合意がたとえそれまでの非友好的だった集団間の関係を修復するものであるとすれば、その運動際合意は、非友好的だった集団間関係を現実に変えることができるだろうか。保証はない。前者が後者に転化するためには系統的な実践的、知的努力とプロセスが必要である。

大きい社会集団と有機的に結合した社会運動のほかに、イッシュユウ別キャンペーンやNGOのアドヴォカシー活動までを視野に入れば、運動際政治と民衆際政治の関係は複雑である。本来的に代表性を備えないNGOは、代行的にふるまいがちであり、そのようなNGOが連合する場合、それが民衆の連合であるかのような仮象が作り出される場合が多い。このような連合は、一定の目標をかちとるためには有効であり不可欠であるけれど、民衆際政治とはかならずしも有機的につながってはいない。すなわち、運動際政治が、どのような民衆際政治を随伴するかは、一義的には決まらない。このギャップのなかに、「もうひとつの世界」をめざす運動の挑戦課題があるということもできるのだ。

複数の異質な性格の社会運動や組織をダイナミックに合流させつつ出現したグローバル正義運動は、こう考えてみると、その後には、多様でかつ重なり合う膨大な社会集団を、すなわち今日グローバル資本主義のもとに編成されているグローバル社会そのものを、もっているとも必要がある。むしろこれは理想化であって、現にあるグローバル正義運動がグローバル社会全体をカバーするほどの広範性をもっているわけではない。だが「もうひとつの世界」への道筋を探るためには、あえて大胆な補助線を引いてみる必要があると私は考える。すなわち〈多様な運動↓多様な社会集団の相互作用〉↓〈運動際政治↓民衆際政治〉という展開の中で、民衆集団間の関係がグローバルな規模で全般的に公正と平等の方向へ組み替えられるという見通しである。それは「もうひとつの世界」をつくってしまうことに他ならない。補助線を引くとは、「運動たちの運動」として開始された第二波の世界変革運動がそのような見通しを開きつつあると想定してみることにほかならない。

▼「ピープルズ・プラン」

——民衆連合と「じゃなかしゃば」

ここで私は、二〇年ほど前に私たちが提唱し具体化した前述の「ピープルズ・プラン21」で私たちが用いたいくつかの概念を今日の状況に照らして検討してみる必要があると感じ

分たちの手で作り直す——共に生きられない関係から共に生きることでできる関係に作り直す——ことよって、グローバル民主主義をグローバルな民衆自治として実現するグローバルなピープル（民衆）が生まれると考えた。これは同質的な主体ではない。グローバルなピープルの生成は一挙的出来事ではなく、多様な民衆が連合していくプロセスである。それを私たちはプロセスとしての「希望の連合」、越境する民衆の連合と呼んだ。水俣会議の基調報告では、そこへ向かっての関係づくりを「民衆際自治」とも呼んでいる。民衆集団内部の自治だけではなく、民衆集団間の関係を、資本や帝国が決めるのではなく、民衆が自分で決め、形作っていく見通しを提案したのである。

私たちはそのとき、グローバルな民衆について同時に二つのつかみかたをしていたのである。第一は豊かさの源泉である民衆の多様性というつかみかたである。第一波の運動が理想としたのは、党と国家の周りに団結する一枚岩の人民であったが、それこそが抑圧を生み出す元凶であったことは明らかである。ここでの多様性とはむしろ複数性の承認という消極的、抽象的な次元のものではない。私たちは、近代世界の単線的で一元的な開発・進歩史観、社会観への根本的懐疑と批判をこめて民衆の多様性を祝福したのであった。一九八九年の日本列島でのプログラムでは、北海道で開かれた世界先住民会議が、人間の自然への敬虔な

る。そこでは今日広く受け入れられている「もうひとつの世界」は、水俣病被害者の運動の中から生み出された「じゃなかしゃば」（こうでない現世）という表現で共有されたのである「7」。

一九八九年夏、日本列島を縦断して行われた最初のピープルズ・プラン21の国際プログラムを総括する水俣会議に向けて、私たちは、グローバルな複合的権力中枢の形成を指摘し、それを解体する「越境する参加民主主義」という考えをうちだした。一国的国家形態としての民主主義にとどまるのではなく、グローバルな権力中枢に支えられた搾取と差別と抑圧の構造を解体するためグローバルな民主主義を獲得しなければならぬと宣言した。グローバル民主主義は定義によってグローバルな民衆による自己統治であるけれど、そのようなグローバルな民衆は現実には存在しない、と私たちは考えた。グローバル民主主義を同質な個人に還元される「地球市民」による統治とすることに私たちは強い違和感を覚えていた。現実には、民衆は国家の壁、人種や宗教の壁、ジェンダーの壁、階級の壁その他の壁で分断され、その上で、相互に抑圧・被抑圧、搾取・被搾取、差別・被差別などの敵対的関係の中に再結合されている。この関係は構造的なものであり、集団間の関係は大幅に自分で選んだ関係ではない。私たちは、民衆の下からの集団間相互作用によってこの壁を破り、相互の関係を自

関係を表す象徴とスピリチュアリティの次元を開いて見せてくれ、それが水俣の被害者の運動のなかで、絶望の中から生み出された願いとしての「じゃなかしゃば」の光と出会ったのである。アジアは多様性の世界であるという自己認識は、単一の価値基準と単線的発展を軍隊と経済と文化の力で民衆に押し付けてきた欧米文明への——そしてその模範的模倣者、走狗となった近代日本への——根本的批判とオルタナティブを含蓄していたのである。多様性は歴史的文脈から切り離すことができないのである。それはいきなり個人の審級に還元される多様性ではなく、常に社会的な多様性、さまざまな文化と歴史、そこに形成されるアイデンティティに、すなわち集団に媒介された多様性にほかならない。

他方私たちは、国民国家が形成されてきた歴史的経過の中で、そしてグローバル複合権力の世界統合が進むにつれてますます、民衆が分断され、対立的関係の中に組織され、重層的な搾取、抑圧関係に組み込まれてきたことに注目して、グローバルな民衆をとらえてきた。それがもうひとつのつかみ方である。多様性と分断とはある状況では絡み合うが、同じ民衆の現実の別の側面なのである。前者は抵抗の相を、後者は支配の相を表している。そして分断は軋轢、紛争を必然化し、多様性の抹殺を志向する。

民衆はいたるところでこの搾取、抑圧、差別、征服にた

いして、与えられた地形の上で抵抗し、闘ってきた。しかし二〇世紀全体を通じてこの闘いが国民国家の枠を超えることは難しかった。国民国家だけでなく、さまざまな分断の壁の内部に閉鎖されたアイデンティティに純化して外部からの侵害と闘うという態度は、しばしば排外主義と内部への権威的支配——なによりも男性優位主義による女性への抑圧——をもたらした。グローバルな構造と対決する自治の主体としてピープルが生成するためには、集団間の敵対的関係を乗り越える民衆際の連合が不可欠なのである。それは外面的・一時的・戦術的協力ではない。ピープルズ・プラン21では、私たちはこの乗り越えを「相互変革的相互作用」を促すことで現実化することを提案した。これはただの希望の表明ではなく、所与の「奴らとわれわれ」という関係をつきくずし、新しい大きい「われわれ」を出現させる現に多くの局面で進行しているプロセスを普遍化しようとする試みである。それは集団間の相互作用——人々が新しい文脈において出会い、相互に友となりうる相手を発見し、それを手掛かりに相互に影響しあうことを不可欠とするプロセスである。このような相互作用は、抑圧的で閉鎖的な関係をゆすぶることで、それぞれの集団の内部関係をも変えていく——相互変革的とはそのことである——ことを私たちは多くの実例を通じて経験しているのだ。男性優位主義の解体はそのもつとも明白な指標である。

(singularity) に ついてある [8]。

ハートとネグリにとって「特異性」とは、マルチチュードと一体の公理的性格をもつ概念である。特異性は差異性と比較しうる概念だが、マルチチュードだけについているものであるという。ピープル（人民）はひとつの存在、群衆は均一な存在であって、ここでは内部の差異は、同一性や均質性に還元されてしまうのだが、マルチチュードはそれ自身で〈共〉（ザ・コモン）を体現している。特異性と呼ばれるその内部の差異は、そのまま横滑りして〈共〉を構成するとされる。なぜそうなるかという点、マルチチュードは「今日新たに支配的となった労働形態」である「非物質的なプロジェクトを生産する労働」（上・二二頁）、「情報やコミュニケーション、協同の生産（社会的諸関係と社会秩序の生産）」（下・二二八頁）に携わる「新たな階級」（上・二五頁）なので、それゆえ「実践において、マルチチュードは個々の人間の特異性の表明が、共闘する他者たちとのコミュニケーションや協働によって……減じられたり損なわれたりしないようなモデル」（上・一二二頁）を与えるというのである。マルチチュードは、生まれながらに〈共〉を体現している、そのなかの差異を含む行為者は、特異なままで結びつき、〈共〉を構成するよう保証されているのである。これはこの著書のいたるところで強調される主張だ。特異性とは「もうひとつの世界」その

国境を越えた民衆の連帯運動や闘争における協働はどのような相互作用なしには成り立たない。しかしそのような相互作用は一回限りのものではなく、集団間と集団内部の抑圧・被抑圧の関係があればそれを現実には減らし、廃棄するためのプロセスのなかに置かれなければ、偽善に終わり、不信を招き、やがてこわれていくだろう。私たちは、こうしたプロセスが開始され、試されている多くの経験を経てきている。それらの実践と実践者の過去・現在の成果と失敗に民衆連合の視点から新しい光を当て、まとめなおすことは、「もうひとつの世界」を獲得するための不可欠の作業だと私は考えている。

▼マルチチュードと特異性の手品

私は、この文脈で、大きい影響力をふるっているハートとネグリの書物『マルチチュード』への批判に踏み込む誘惑にかられる。『帝国』もそうであるが、ハートとネグリは、私が論じたことごとくと大幅に重なることごとくを論じながら、概念操作のみから生み出される能天気としかいようのない議論によって、もつとも困難な実践の節目ととびこせるかのような幻想にわれわれを誘ってくれるのである。問題はマルチチュードという概念構成そのものにあると私は見ているのだが、全面的批判は他日にゆずって、この稿ではあえて一点だけを取り上げてみよう。「特異性」

ものであるはずの〈共〉と背中合わせに結合された特権を有する概念である。

しかしどのような現実が頭に置かれているのか。九九年のシアトルデモで、労働組合、環境運動など異質の背景をもつ集団が行動を共にしたことが挙げられている（下・一五八〜一六四頁）。それらは行動を共にすることで、あらかじめ保証されていた〈共〉を実証したのである。ハートとネグリの特異性たちは、相互に衝突したり、論争したり、自己変革を遂げたりはしないのである。それらはあらかじめ〈共〉を体現しているからである。著者たちは全体を通じて、特異性が何を指しているのか、特異性どうしは触れ合い作用し合うのか、説明や分析をしない。語られているのは特異性そのもの、マルチチュードから直接に生成する抽象的な特異性、具体的経験に媒介されない特異性である。そのような抽象的特異性が強調されればされるほど、印象に残るのはむしろ逆にマルチチュードの単一性・一体性である。『マルチチュード』という書物は、読み進むほどに古典的な議論のリフレインを耳に鳴り響かせてくれるのである。それは、産業労働者階級に代わって、いまやマルチチュードが〈共〉を本来的にはらむ救世主として出現したのだという託宣である。

現実はどうか。私たちはそのような救世主を信じることはできない。私たちは、いやおうなく分断から出発しなけ

ればならない。ハートたちが言うように私たちが帝国の下で永続的戦争に引き込まれているとすれば、民衆間の殺戮が煽られ、大国の傲慢がまかり通り、貧富の差がとめどなく拡大しているとすれば、〈共〉の創造は障壁を下から掘り崩し、分断を乗り越え、憎しみの文化を無力化し、民衆間対立を必然化する構造を変革することに、精力を傾けなければならぬのではないか。「もうひとつの世界」はそのような実践を通じて獲得するしかないのである。

▼プロセスとしての民衆憲章へ

運動際政治をつうじて、民衆連合としての民衆際政治の展開へというのが私のとりあえずの見通しである。もちろんそれは単純なプロセスではない。先に先住民と女性という大きい二つの集団の関係を先住民運動とフェミニスト運動の関係つくりに関連させる図式を提示したが、言うまでもなくこのような単純な図式に見合う現実には存在しない。排他的に存在する集団は存在せず、個人は複数の集団的アイデンティティの交差を体現している。代表・被代表という関係で運動と社会集団を律するのが許されない一因はここにある。民衆集団がみずからの力で——運動を媒介として——新しい関係を編み上げていくプロセスは、したがって、きわめて複雑でダイナミックな様相を呈するに違いない。そのさまは集団が横並びに手をつなぐ姿ではなく、シナプ

シスによる脳細胞のダイナミックな多角的結びつきが立体的に形成されるプロセスとしてイメージされるだろう。同時に大きい区分も厳として存在する。グローバル社会は依然として国家、ジェンダー、階級、人種などという大きい区分によって分断されていて、それらは集団際関係に大きい規定力を発揮している。

この複雑な関係の束をどこで断ち切り、どのように別の姿に編み上げていくのか。前述した第二波運動にとつての「決め手」の問題はそこにあるのだが、この稿ではその前提のところまで紙数が尽きてしまった。乱暴に結論を先取りすれば、私は「民衆連合」の形成に有機的に組み合わされた「民衆憲章」(People's charter)の下からの獲得プロセスに「決め手」に相当するプロセスを見ている。そしてこの分野ではすでにさまざまな具体的な試みが行われているほか、民衆憲章とは無関係とみなされているが実はその基礎的部分を編み上げているにちがいない人びとの豊かな実践が存在する。

この稿は、前号の「上」に続いて今回の「下」で、こまごま踏み込んで一応完結させるつもりだったが、果たせなかった。白川編集長の勧めもあり、上、中、下の形で端折った議論を展開するより、これまでを序論としつつ、稿を改めて「プロセスとしての民衆憲章」というテーマを詳しく論じたいと考えている。

【注】

[1] 一九九四年一月にメキシコ、チアパスで蜂起したサパテイスタ民族解放戦線(EZLN)は、一九九六年八月、人類のためにネオリベリズムに反対する大陸際会議を本拠地で開催した。五〇カ国の活動者が参加し、ネオリベリズムに反対するネットワークをすべての大陸で発足させることを決めた。EZLNのマルコス副司令官はこれを「銀河際の出会(Inter-galactic Encuente)」と呼んだ。

[2] 一九九九年のシアトルWTOデモに合流したネオリベラル・グローバル化に反対する勢力全体を漠然と指す名称として使われているが、はっきりした起源は不明。WSFはその枠内で行われる自発的プログラムのひとつとして社会運動の集まり(Assembly of Social Movements)を開いているが、二〇〇三年WSFのこの集まりで出した「社会運動の呼びかけ」(Call of Social Movements)や「Global Justice and Solidarity Movement (グローバル正義と連帯運動)」という用語を提案し、後に短縮されて「Global Justice Movement」として流通するようになったという説明もある。

[3] 「運動たちの運動」と訳したA Movement of Movementsも誰が最初に言い出したかは明確でないが、GJMとはほぼ同義で使われているようである。Tom Merres 編の書物*A Movement of Movements: Is Another World Possible?* (Verso, 2004)はサパティスタのマルコス副司令官からウォルデン・ベロ、ジョゼ・ボヴェ、デーヴィッド・グレーバー、ナオミ・クラインなどとのインタビューから成っていて、ここでは武装闘争のせいでWSFからは排除されているサパティスタも加えら

れている。

[4] ピーター・ウォーターマン「グローバル・ジュステイス&連帯運動、そして世界社会フォーラム——ひとつの背景説明」ジャイ・セン他編(武藤一羊・小倉利丸他監訳)『世界社会フォーラム——帝国への挑戦』、作品社、二〇〇五年、一三三ページ(文中訳文は武藤)。

[5] [http://www.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=](http://www.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=strategy_debate_en)strategy_debate_en

[6] Bovenhura de Sousa Santos, "The World Social Forum and the Global Left" <http://www.forumsocialmundial.org>.

[7] ピーブルズ・プラン21の概略については、武藤一羊『帝国の支配/民衆の連合』社会評論社、二〇〇三年に所収の「ここからどこへ——地球規模の対抗社会への模索——『ピーブルズ・プラン21世紀』の七年」、「新自由主義的グローバル化と民衆の連合——九〇年代とピーブルズ・プラン21」を参照。また武藤『ヴィジョンと現実——グローバル民主主義への架橋』インパクト出版会、一九九八年にも関連論文、資料がある。一九九九年の日本における「ピーブルズ・プラン21」の記録は、「ピーブルズ・プラン21世紀——希望の連合へ——一九八九年夏/報告集」としてアジア太平洋資料センター(PARC)に置かれた実行委員会が発行した報告集がある。

[8] アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート(幾島幸子訳)『マルチチュード』上・下、NHK出版、二〇〇五年。引用箇所は文中。

(むとう いちよう/ピーブルズ・プラン研究所運営委員)